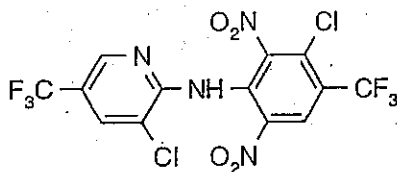


# フルアジナム

1. 品目名：フルアジナム (fluazinum)

2. 用途：殺菌剤

3. 構造式及び物性



分子式 :  $C_{13}H_4Cl_2F_6N_4O_4$

分子量 : 465.1

水溶解度 : 1.7mg/L (pH6.8, 25°C)

分配係数 :  $\log P_{ow}=3.56$  (25°C)

蒸気圧 :  $1.4 \times 10^{-3}$  Pa (25°C)

(メーカー提出資料より)

4. 吸収・分布・代謝・排泄

(1) 動物

SDラットを用いた経口 (0.5mg/kg) 投与による試験において、血中濃度の  $T_{max}$  は2~6時間、 $C_{max}$  は0.031~0.060  $\mu$ g eq./g、 $T_{1/2}$  は13~15時間程度と考えられる。投与6時間後の組織内濃度は、肝、腎、ハーダー腺で高く、それぞれ0.093~0.441、0.064~0.139、0.041~0.086  $\mu$ g eq./gである。投与168時間後の組織内濃度は、肝、腎、甲状腺 (雌のみ) で高く、それぞれ0.0130~0.0134、0.0079~0.0108、0.00209  $\mu$ g eq./gであり、その他の組織では、同程度又はそれ以下である。投与168時間以内に糞中に85~95%、尿中に1.5~6.7%排泄される。本薬の主要代謝物は未変化体であるが、その他にニトロ基の還元により生成したアミン並びにシステイン-硫酸抱合体又はメルカプツール酸抱合体が認められる。

本薬の主要な代謝経路は、フェニル基の2-及び6-ニトロ基の還元及びグルタチオン抱合による脱クロル化より生成した代謝物の硫酸抱合体化又はメルカプツール酸への変換である。

(2) 植物

いんげんを用いた代謝試験において、葉面又は莢処理35~42日後の子実部の残留放射能は0.06~0.2ppmである。

ぶどうを用いた代謝試験において、散布処理21日後の果実中の残留放射能は1.24~1.56ppmである。

植物体における主要代謝物は未変化体の他、フェニル基2-位のニトロ基の還

元によるアミン体である。

### (3) その他

上記を含め、別添1に示した試験成績が提出されている。

## 5. 安全性

### (1) 単回投与試験

急性経口LD<sub>50</sub>は、マウス及びラットで5,000mg/kg超と考えられる。

### (2) 反復投与/発がん性試験

ICR マウスを用いた混餌 (1, 10, 100, 1000ppm) 投与による 104 週間の発がん性試験において、1,000ppm 投与群の雄で肝比重量の増加、肝の好塩基性又は好酸性細胞巢、肝細胞腫瘍、雌で肉芽腫性肝炎、褐色色素沈着大食細胞集簇、100ppm 以上投与群の雄で肉芽腫性肝炎、褐色色素沈着大食細胞集簇、雌で肝比重量の増加が認められる。本試験における無毒性量は 10ppm (1.12mg/kg/day) と考えられる。

本試験で認められる肝細胞腫瘍の発生は、マウスを用いた薬物代謝酵素誘導試験でフェノバルビタール様の酵素誘導パターンが認められていること、さらに活性酸素の産生亢進が認められなかったこと、肝組織の PCNA 免疫染色の結果及び遺伝毒性試験成績等から、非遺伝毒性メカニズムによるものと考えられる。

SD ラットを用いた混餌 (1, 10, 100, 1000ppm) 投与による 104 週間の反復投与/発がん性併合試験において、1,000ppm 投与群の雌雄で肺胞の気管支上皮化生、肝の好酸性細胞巢の増加、小葉中心性肝細胞壊死、小葉中心性肝細胞脂肪化、小葉中心性類洞拡張、雄で胆管増生、雌で膵の腺上皮細胞空胞化、100ppm 以上投与群の雌雄で摂餌量の低下、体重増加抑制、血中 T.Chol. の増加、小葉中心性肝細胞粗鬆化/空胞化、雌で肝重量の増加、膵の外分泌細胞の脱顆粒の頻度の増加が認められる。発がん性は認められない。本試験における無毒性量は 10ppm (0.38mg/kg/day) と考えられる。

SD ラットを用いた混餌 (10, 25, 50, 100ppm) 投与による 104 週間の反復投与試験において、100ppm 投与群の雄で精巣比重量の増加、死亡・切迫屠殺動物での精巣の小型、軟化の頻度の増加、雌で Hb の減少、肝比重量の増加が認められる。本試験における無毒性量は 50ppm (1.9mg/kg/day) と考えられる。

以上2試験の結果からラットに対する無毒性量は 1.9mg/kg/day と考えられる。

ビーグル犬を用いた強制経口 (1, 10, 50mg/kg) 投与による 52 週間の反復投与試験において、50mg/kg 投与群の雌雄で体重増加率の低下、流涎、血球体積、Hb 及び赤血球数の低下、肝重量の増加、雄で鼻乾、白血球数及び好中球の増加、10mg/kg 以上投与群の雄で胃粘膜のリンパ球細胞増生の強度増大、雌で鼻乾、白血球数及び好中球の増加、骨髓球/赤芽球比の上昇が認められる。本試験の無毒性量は 1mg/kg/day と考えられる。

### (3) 繁殖試験

SD ラットを用いた混餌 (20, 100, 500ppm) 投与による 2 世代繁殖試験において、親動物では 500ppm 投与群の F<sub>0</sub> の雌及び F<sub>1</sub> の雌雄で体重増加抑制及び摂餌量の低下、F<sub>0</sub> 及び F<sub>1</sub> の雌雄で肝比重量の増加、100ppm 以上投与群の F<sub>0</sub> 及び F<sub>1</sub> の雄で肝細胞グリコーゲン淡明化の頻度低下、小葉中心性肝細胞肥大が認められる。また、500ppm 投与群では母体での着床数の低下が認められる。児動物では、500ppm 投与群の F<sub>2</sub> で総産児数の低下、F<sub>1</sub> 及び F<sub>2</sub> で体重低下が認められる。本試験における無毒性量は 20ppm (1.47mg/kg/day) と考えられる。

### (4) 催奇形性試験

SD ラットを用いた強制経口 (10, 50, 250mg/kg) 投与による催奇形性試験において、母動物では 250mg/kg 投与群で体重増加抑制及び摂餌量の低下が認められる。胎児動物では、250mg/kg 投与群で低体重が認められる。本試験における無毒性量は母動物、胎児動物ともに 50mg/kg/day と考えられる。母動物に中毒症状が認められる高用量において催奇形性が認められる。

ニュージーランドホワイトウサギを用いた強制経口 (0.3, 1.0, 3.0mg/kg) 投与による催奇形性試験において、母動物、胎児動物ともに本薬投与に関連した影響は認められない。本試験における無毒性量は母動物、胎児動物ともに 3.0mg/kg/day と考えられる。催奇形性は認められない。

ニュージーランドホワイトウサギを用いた強制経口 (2, 4, 7, 12mg/kg) 投与による催奇形性試験において、母動物では 12mg/kg 投与群で全児死亡及び流産の発生頻度の上昇、体重増加抑制が、7mg/kg 以上投与群で摂餌量の減少、4mg/kg 以上投与群で肝細胞肥大、肺の胸腔内液体貯留が認められる。胎児動物では 12mg/kg 投与群で着床後胚死亡率の上昇が認められる。本試験の無毒性量は母動物で 2mg/kg/day、胎児動物で 7mg/kg/day と考えられる。催奇形性は認められない。

以上 2 試験の結果からウサギを用いた催奇形性試験の無毒性量は母動物で

は 2mg/kg/day、胎児動物では 3mg/kg/day と考えられる。

#### (5) 遺伝毒性試験

Rec-assay、細菌を用いた復帰突然変異試験、マウスリンフォーマTK試験、チャイニーズハムスター培養細胞 (CHL) を用いた染色体異常試験、ヒト線維芽細胞を用いた不定期 DNA 合成試験、雌ラット肝細胞を用いた不定期 DNA 合成試験、チャイニーズハムスター骨髄における核異常試験、マウスを用いた小核試験が行われている。結果は全て陰性であり、本薬は生体にとって特段問題となるような遺伝毒性はないものと考えられる。

#### (6) その他

上記を含め、別添1に示した試験成績が提出されている。

### 6. ADIの設定

以上の結果を踏まえ、次のように評価する。

無毒性量	1mg/kg/day
動物種	イヌ
投与量/投与経路	1mg/kg/混餌
試験期間	52週間
試験の種類	反復投与試験
安全係数	100
ADI	0.01mg/kg/day

### 7. 基準値案

別添2の基準値案のとおりである。各農産物について基準値案の上限まで本農薬が残留していると仮定した場合、国民栄養調査結果に基づき試算される、1日当たり摂取する農薬の量(理論最大摂取量)のADIに対する比率は55.4%以下である。

## (別添1)

資料番号	試験の種類・ 期間	供試 生物	1群当り 供試数	投与 方法	投与量 (mg/kg)	LD50 値または 最大無作用量 (mg/kg)	試験機関 (報告年)
T-1.1 (GLP)	急性毒性 14日間観察	ラット	♂ 5 ♀ 5	経口	♂ 5000 ♀ 5000	♂ >5000 ♀ >5000	LSR (1988)
T-1.2 (GLP)	急性毒性 14日間観察	マウス	♂ 5 ♀ 5	経口	♂ 5000 ♀ 5000	♂ >5000 ♀ >5000	LSR (1988)
T-1.3 (GLP)	急性毒性 14日間観察	ラット	♂ 5 ♀ 5	経皮	♂ 2000 ♀ 2000	♂ >2000 ♀ >2000	LSR (1984)
T-2.1	亜急性毒性 13週	ラット	♂ 10 ♀ 10	飼料 混入	0, 2, 10, 50, 500 ppm ----- ♂ 0.15, 0.77, 3.8, 38 ♀ 0.17, 0.86, 4.3, 44 mg/kg/day	♂ 10 ppm ♀ 10 ppm ----- ♂ 0.77 ♀ 0.86 mg/kg/day	LSR (1985)
T-2.2	亜急性毒性 (投与13週 回復4週)	ラット	♂ 20 ♀ 20	飼料 混入	0, 500 ppm ----- ♂ 37.63 ♀ 44.70 mg/kg/day	♂♀共投与13週後の 変化が回復4週にな くなった。	LSR (1985)
T-2.3	亜急性毒性 13週	イヌ	♂ 4 ♀ 4	カプセル	0, 1, 10, 100 mg/kg/day	♂ 10 ♀ 10 mg/kg/day	LSR (1985)
T-2.4 (GLP)	亜急性毒性 (投与11週 回復5週)	イヌ	♂ 6	カプセル	0, 200 mg/kg/day (3-5週以降150)。 目的はT2.3での検服所 見の確認。	光顕、電顕で変化な し。ERGの変化は大部 分回復	ICI-Ph (1986)
T-3.1 (GLP)	慢性毒性/ 発癌性 24ヶ月	ラット	♂ 60 ♀ 60	飼料 混入	0, 1, 10, 100, 1000 ppm ----- ♂ 0.04, 0.38, 3.82, 40 ♀ 0.05, 0.47, 4.87, 53 mg/kg/day	♂ 10 ppm ♀ 10 ppm ----- ♂ 0.38 mg/kg/day ♀ 0.47 mg/kg/day	HRC (1988)
T-3.1A (GLP)	慢性毒性 24ヶ月	ラット	♂ 25 ♀ 25	飼料 混入	0, 10, 25, 50, 100 ppm ----- ♂ 1.0, 1.9, 3.9 ♀ 1.2, 2.4, 4.9 mg/kg/day	♂ 50 ppm ♀ 50 ppm ----- ♂ 1.9 mg/kg/day ♀ 2.4 mg/kg/day	HRC (1993)
T-3.2 (GLP)	慢性毒性 52週間	イヌ	♂ 6 ♀ 6	カプセル	♂ 0, 1, 10, 50 ♀ 0, 1, 10, 50 mg/kg/day	♂ 1 mg/kg/day ♀ 1 mg/kg/day	LSR (1987)
T-3.3 (GLP)	発癌性 24ヶ月	マウス	♂ 52 ♀ 52	飼料 混入	0, 1, 10, 100, 1000 ppm ----- ♂ 0.12, 1.12, 10.7, 107 ♀ 0.11, 1.16, 11.7, 117 mg/kg/day	♂ 10 ppm ♀ 10 ppm ----- ♂ 1.12 mg/kg/day ♀ 1.16 mg/kg/day	HRC (1988)

資料番号	試験の種類・期間	供試生物	1群当り供試数	投与方法	投与量 (mg/kg)	LD50 値または最大無作用量 (mg/kg)	試験機関 (報告年)
T-4.1 (GLP)	繁殖 2世代	ラット	♂ 24 ♀ 24	飼料 混入	0, 20, 100, 500 ppm  P ♂ 1.49, 7.26, 36.6 ♀ 1.71, 8.43, 42.1 mg/kg/day  F1 ♂ 1.93, 9.67, 47.3 ♀ 2.19, 10.6, 53.6 mg/kg/day	親動物: 20 ppm 仔動物: ppm 繁殖性: 100 ppm  親動物: ♂ 1.49 ♀ 1.71 仔動物、繁殖性: ♂ 7.26 ♀ 8.43 mg/kg/day	LSR (1987)
T-4.2	催奇形性	ラット	妊娠♀ 20	経口	0, 10, 50, 250 mg/kg/day	母体: 10 胎仔: 10 催奇形性: 10 mg/kg/day	LSR (1985)
T-4.3	催奇形性	ウサギ	妊娠♀ 20-24	経口	0, 0.3, 1, 3 mg/kg/day	母体: 3 胎仔: 3 mg/kg/day 催奇形性なし	LSR (1985)
T-4.4 (GLP)	催奇形性	ウサギ	妊娠♀ 16-18	経口	0, 2, 4, 7, 12 mg/kg/day	母体: 2 胎仔: 7 mg/kg/day 催奇形性なし	LSR (1988)
T-5.1 (GLP)	変異原性 復帰変異	サルモネラ菌: TA100, TA98, TA1535, TA1537, 大腸菌: WP2 uvrA		in vitro	S. typh: -S9: 0.0625, 0.125, 0.25, 0.5, 1, 2 +S9: 3.13, 6.25, 12.5, 25, 50, 100 E. Coli: -S9: 15.6, 31.3, 62.5, 125, 250, 500 +S9: 3.13, 6.25, 12.5, 25, 50, 100 (µg/プレート)	陰性	化検協 (1986)
T-5.2 (GLP)	変異原性 進行変異	マウスリンパ球		in vitro	-S9: 0.3, 0.6, 1.2, 1.8, 2.4, 2.7, 3.0, 0.5, 1, 2, 3, 4, 4.5, 5 +S9: 0.5, 1, 2, 3, 4, 4.5 5 (µg/mL)	陰性	C-G (1986)
T-5.3 (GLP)	変異原性 染色体異常	CHL細胞		in vitro	直接法; 1, 2, 4 代謝活性化法; 2.375, 4.75, 9.5 (µg/mL)	陰性	化検協 (1988)

資料番号	試験の種類・期間			供試生物	1群当り供試数	投与方法	投与量 (mg/kg)	LD50 値または最大無作用量 (mg/kg)	試験機関 (報告年)
T-5.4	変異原性 核異常			ハムスター	♂ 3 ♀ 3	経口	♂♀共に 0, 1250, 2500, 5000 1回/日×2日	♂♀共に陰性	C-G (1984)
T-5.5 (GLP)	変異原性 DNA修復			枯草菌: H17(rec <sup>+</sup> ), M-15(rec <sup>-</sup> )		in vitro	-S9: 0.003, 0.01, 0.03, 0.1, 0.3 +S9: 0.3, 1, 3, 10, 30 (µg/ディスク)	陰性	化検協 (1988)
T-5.6	変異原性 DNA修復			ヒト線維芽細胞		in vitro	16, 80, 400, 2000 ng/mL	陰性	C-G (1984)
T-5.7	変異原性 DNA修復			雄ラット肝細胞		in vitro	0.05, 0.25, 1.25, 6.25 µg/mL	陰性	C-G (1984)
T-6.1	生体の機能に及ぼす影響	中枢神経系	一般症状	マウス Irwin法	♂ 3 ♀ 3	腹腔	0, 10, 20, 40, 80, 160, 320	♂ 160 ♀ 80 mg/kg	メクト・松本歯科大 (1988)
			脳波	ウサギ	♂ 3	静脈	0, 0.1, 0.5, 1.0, 2.0 漸増	0.5 mg/kg	
		呼吸循環器系	ラット 血圧 心拍数	♂ 3	静脈	0, 0.1, 0.2, 0.5, 1.0, 2.0	NOELは取れなかった。		
		自律神経系	ウサギ 体温・瞳孔径	♂ 3	静脈	0, 0.25, 0.5, 1.0	> 1.0 mg/kg		
		消化器	ラット 小腸炭末輸送	♂ 10	皮下	0, 625, 1250, 2500, 5000	2500 mg/kg		
		骨格筋	ウサギ	♂ 3	静脈	0, 0.2, 0.5, 1.0, 2.0 漸増	1.0 mg/kg		
		溶血性	ウサギ 赤血球/生理食塩水	♂ 1		0, 10 <sup>-2</sup> , 5×10 <sup>-3</sup> , 10 <sup>-4</sup> , 5×10 <sup>-4</sup> , 10 <sup>-3</sup> g/mL	5×10 <sup>-4</sup> g/mL		

資料番号	試験の種類・ 期間	供試 生物	1群当り 供試数	投与 方法	投与量 (mg/kg)	LD50 値または 最大無作用量 (mg/kg)	試験機関 (報告年)
TM1 (GLP)	MAPA(G-525) 急性毒性	マウス	♂ 5 ♀ 5	経口	♂ 5000 ♀ 5000	♂ >5000 ♀ >5000	HRC (1988)
TM2 (GLP)	MAPA(G-525) 変異原性 復帰変異	サルモネラ菌： TA100, TA98, TA1535, TA1537, 大腸菌：WP2 uvrA		In vitro	±S9Mix 313, 625, 1250, 2500, 5000  TA1537： -S9; 31.3, 62.5, 125, 250, 500, 1000 (µg/プレート)	陰性	化検協 (1989)
TM3 (GLP)	HYPA(G-450) 急性毒性	マウス	♂ 5 ♀ 5	経口	♂♀共に 160, 250, 400, 640	♂ 349 ♀ 317	HRC (1988)
TM4 (GLP)	HYPA(G-450) 変異原性 復帰変異	サルモネラ菌： TA100, TA98, TA1535, TA1537, 大腸菌：WP2 uvrA		In vitro	-S9Mix 125, 250, 500, 1000, 2000, 4000 +S9Mix 156, 313, 625, 1250, 2500, 5000 (µg/プレート)	-S9 S. typh. TA98 に軽度陽 性 +S9 陰性	化検協 (1989)
TM5 (GLP)	HYPA(G-450) 変異原性 小核試験	マウス	♂ 6	経口	0, 400 mg/kg: 16, 24, 48, 72hr 後骨髄採取 100, 200 mg/kg: 24hr 後骨髄 採取	小核誘発性なし 陰性	残研 (1989)
TM6 (GLP)	CAPA(G-503) 急性毒性	ラット	♂ 5 ♀ 5	経口	2625.9, 3413.7, 4437.8, 5769.2, 7500	♂ 3892.2 ♀ 4492.5	日生化 (1991)
TM7 (GLP)	CAPA(G-503) 変異原性 復帰変異	サルモネラ菌： TA100, TA98, TA1535, TA1537, TA102 大腸菌：WP2 uvrA		In vitro	±S9Mix 156, 313, 625, 1250, 2500, 5000 (µg/プレート)	陰性	日生化 (1991)



資料No	試験の種類	供試動物植物等	投与方法 処 理 量	結 果	試験機関 (報告年)
M-1.1	動物代謝	ラット	経口 0.5及び50mg/kg 1回	尿よりも糞に多量に1日以内に投与量の2/3以上が排泄された。組織中の残留は肝臓・脂肪・腎臓で高かった。尿中に親化合物以外に微量の変化生成物があった。	C-G (1985)
M-1.2			経口 49.8mg/kg 1回	尿・糞・胆汁へ 2-3%、39-68%、16-37%がそれぞれ排泄された。経口投与した多くは腸管から吸収され胆汁とともに十二指腸へ排泄される。	C-G (1987)
M-1.3			経口 49.8mg/kg 1回	投与した放射能の3.1%尿へ、84.7%が糞へ排泄され胆汁中へは25.1%であった。胆汁中の代謝物は AMPA-M、DAPA-G、AMPA-S、糞中の代謝物は DAPA、MAPA、AMPA、DAPA-CS であった。	C-G (1987)
M-1.4				資料M-1.2とM-1.3で得られた胆汁・糞より単離された代謝物について構造解析を行い、AMPA、MAPA、DAPA、AMPA-M、DAPA-G、AMPA-S、DAPA-CSの構造が解明された。	C-G (1986)
M-1.5			経口 0.5及び50mg/kg 1回	糞中70%以上、尿中1.5%以下排泄された。組織分布では肝臓に最も高い放射能が認められた。血液中濃度は投与後6時間が最高濃度であり、その後減少した。全身ラジオオートグラムで分布を調べた。	第一化 (1988)
M-1.6			経口 0.5及び50mg/kg 1回及び反復	雄ラットは尿中に6.7%、糞中に91.4%が排泄された。血液中濃度は投与後2時間に最高濃度を示し、漸減した。組織内分布は肝臓の褐色脂肪に最も高い放射能が認められた。全身オートラジオグラムで分布を調べた。雄ラットにおける反復投与の結果は吸収、分布及び排泄いずれも単回投与と相違は認められなかった。	第一化 (1989)
M-2.1	植物代謝	いんげん 予備検討		親化合物と予想代謝物等の分離に最適な薄層クロマトグラフィー条件を設定した。極性物質の酵素水解及び加水分解をおこなったが変化は認められなかった。	第一化 (1987)
M-2.2		いんげん 幼植物	葉面塗布 水耕処理 100µg/plant 1回	葉面塗布での内部移行は1%程度であり、98%以上は洗浄液中に検出された。水耕根部処理で茎葉部への移行は少ない。根内部への移行は20%程度であった。代謝物はMAPA、HYPAが確認されたが微量であり、残留する物質の大部分は未変化化合物であった。	第一化 (1987)
M-2.3		いんげん 成熟植物	葉・葉面塗布 土壌処理 3mg/plant 1回	葉・葉面塗布での内部移行は極かであり大部分は洗浄液で除かれる。土壌処理でも茎葉葉・根への移行は少ない。代謝物はMAPA・HYPAであり、いずれも微量であり残留する物質の大部分は未変化化合物であった。	第一化 (1987)
M-2.4		ぶどう園場	散布 1kg/ha 3回	ぶどう果内に親化合物が1.44ppm残留していた。代謝物の分離を液-液分配、順相、逆相、準分配液体クロマトグラフィーで分けた。分離した1つの10%以上の代謝物と微量な数個の代謝物を確認した。	ICI (1985)
M-2.5		ぶどう果実	注入 10ppm	上記ぶどう園場試験で1つの10%以上の不明代謝物が検出されたので、これを確認するためぶどうにフルアジナムを注入し、7日後まで保存し、代謝物等を調査した。その結果はMAPAが主代謝物であり、上記の不明代謝物はMAPAと考えられた。	石原研 (1989)
M-3.1	土壌分解等	土壌分解	添加 1kg/ha10当	半減期は処理濃度、温度等条件で異なり4~165日であった。 <sup>14</sup> Cの生成は少ない。土壌結合放射能は各種の溶媒抽出によるにもかかわらず水溶性として残った。分解物はMAPA、DAPA、HYPAが同定された。	ICI (1985)

農産物名	基準値案 ppm	登録 有無	参考基準値			作物残留試験成績 ppm	備考
			登録保留 基準値 ppm	国際 基準 ppm	外国 基準値 ppm		
米(玄米をいう)							
小麦 大麦 ライ麦 とうもろこし そば 上記以外の穀類	0.1	○	0.1				
大豆 小豆類(いんげん、ささげを含む) えんどう そらまめ らっかせい 上記以外の豆類	0.1	○	0.1				
ばれいしょ さといも類(やつがしらを含む) かんしょ やまいも(長いもをいう) こんにゃくいも 上記以外のいも類	0.1 0.05	○ ○	0.1 0.05				
てんさい さとうきび	0.5	○	0.5				
だいこん類(ラディッシュを含む)の根 だいこん類(ラディッシュを含む)の葉 かぶ類の根 かぶ類の葉 西洋わさび クレソン はくさい キャベツ 芽キャベツ ケール こまつな きょうな カリフラワー ブロッコリー 上記以外のあぶらな科野菜	/ 0.05 0.1	○ ○	0.05 0.1		0.01 0.01	オーストラリア オーストラリア	
ごぼう サルシフィー アーティチョーク チコリ エンダイブ しゅんぎく レタス(サラダ菜及びちしゃを含む) 上記以外のさく科野菜	0.05 0.1	○ ○	0.05 0.1				
たまねぎ ねぎ(リーキを含む) にんにく アスパラガス わけぎ 上記以外のゆり科野菜	0.1 0.1 0.1 0.1	○ ○ ○ ○	0.1 0.1 0.1 0.1				
にんじん パースニップ パセリ セロリ みつば 上記以外のせり科野菜							
トマト ピーマン なす 上記以外のなす科野菜							
きゅうり(ガーキンを含む) かぼちゃ(スカッシュを含む) しろり すいか メロン類果実 まくわり 上記以外のうり科野菜							

農産物名	基準値案 ppm	登録 有無	参考基準値			作物残留試験成績 ppm	備考
			登録保留 基準値 ppm	国際 基準 ppm	外国 基準値 ppm		
ほうれん草 オクラ しょうが 未成熟えんどう 未成熟いんげん えだまめ							
マッシュルーム しいたけ 上記以外のきのこ類 上記以外の野菜							
みかん なつみかん なつみかんの外果皮 なつみかんの果実全体 レモン オレンジ(ネーブルオレンジを含む) グレープフルーツ ライム 上記以外のかんきつ類果実	0.5 5 5 5 5 5 5	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	0.5 5 5 5 5 5				
りんご 日本なし 西洋なし マルメロ びわ	0.5 0.5 0.5 0.5	○ ○ ○ ○	0.5 0.5 0.5 0.5				
もも ネクタリン あんず(アプリコットを含む) すもも(プルーンを含む) うめ おうとう(チェリーを含む)	0.5 0.5 0.5 0.5	○ ○ ○ ○	0.5 0.5 0.5 0.5				
いちご ラズベリー ブラックベリー ブルーベリー クランベリー ハックルベリー 上記以外のベリー類果実							
ぶどう かき	0.5 0.5	○ ○	0.5 0.5				
バナナ キウイ パパイヤ アボカド パイナップル グアバ マンゴー パッションフルーツ なつめやし 上記以外の果実	0.5 0.5	○ ○	0.5 0.5				
ひまわりの種子 ごまの種子 べにばなの種子 綿実 なたね 上記以外のオイルシード							
ぎんなん くり ペカン アーモンド くるみ 上記以外のナッツ類							
茶 コーヒー豆 カカオ豆 ホップ	5	○	5				